53 『四海同春』について

宮川隆弘
日本鍼灸研究会

本書は『難経』の脈診に関する論説を中心とする二巻全二十七篇からなる脈書である。明・万暦二十五（一五九七）年に序刊されたが、あまり流布しなかったらしく、『四庫全書総目提要』や多紀元胤『医籍考』にも著録されておらず、一九九一年版の『全国中医図書聯合目録』にも、上海中医学院図書館所蔵本が載せられているだけである。幸いな事に、この所蔵本は一九八四年に上海科学技術出版社から影印本がある。著者である明の朱棟隆（生没年未詳）は江蘇丹陽の人、字を子吉、春海と号し、瓶城子と別号した。本書のほかに『痘疹不求人』一巻（別名「痘疹不求人方論」「経験痘疹」。清刊本あり）及び『脈薬蠡管』八巻（佚）の著作がある。

巻之一は十九篇の医論からなるが、その眼目は、第二篇から第七篇までの『難経』の菽法に関する論述にある。まず冒頭の擬王叔和註内経二十四脈形状第一では『脈経』の二十四脈状に大小二脈を加えた二十六脈につき、歴代の脈状の定義を踏まえつつ、その脈状、脈証、治法につき、著者独自の見解を述べている。次の按難経菽数軽重定臓腑等第二では、『難経』五難における脈の軽重の単位である菽数と臓腑の関係を述べている。注目されるのは、左右寸関尺六部を按ずる場合、それぞれを所定の菽数で按ずるだけでなく、その脈が菽数の示す深さより浅いところにあればその臓の有余、深いところにあれば不及とする点である。例えば、肺の脈であれば三菽を平脈とし、一菽の外、皮毛の上にあれば「肺之有余」、逆に六菽であれば「肺之不足」、十菽以下であれば「肺之太不足」とするのである。次篇の遵難経菽数軽重定臓腑虚実寒熱過不足第三では、先ず「演『難経』菽数軽重診脈図」と題する両手二枚の図を置いて、第二篇で述べた脈法、即ち左右寸関尺六部の菽数とその正脈（平脈）、有余、不足が詳細に図示されている。その後に十二経それぞれが配当されて

いる臓腑の病證、及び虚實寒熱の際の脈状と薬方が十二枚の図に要約されている。諸経気血有余不足並部位等第診治例等図第四では、第三篇冒頭の「演『難経』菽数軽重診脈図」の内容を十二経ごとの図に代え、臓象並びに有余不足の病証や薬物を付加している。十四経穴起止部位第五では、十四経の起始停止を略論するが、十二経の流注方向が『霊枢』經脈篇のそれとは異なり、全て手足の末端穴から求心的に述べられていることが注目される。按難経菽数軽重定臓腑等第脈第六では、再び左右寸関尺六部の診脈部位と菽数が左右二枚の図解付きで詳論されている。遵難経菽数軽重応背腹兪募上下第七は、診脈による臓腑の異常の判定に、背部兪穴及び腹部募穴が対応することを詳細に述べたものである。兪穴と募穴を脈診に結びつけるという内容は、本書が刊行された明代後期頃には見られない独特な方法であり、中国脈診の歴史の中でも大変稀なものであると考えられる。これ以下、第九篇から第十九篇でも『素問』や『難経』の脈法の重要問題が取り上げられているが、ここでは省略する。

巻之二は八篇の医論からなる。冒頭の二十四脈統候第二十では二十四脈の基本的脈證と寸関尺に現れた場合の脈證を述べ、遵難経以菽豆形擬脈第二十一では『難経』の菽の形状に基づき、二十九脈状の形状を図入りで解説する。これ以下にも臓腑脈診や、『医経小学』などに見られる二十四脈相類への評価などを論じた篇が続き、巻末の十四経及奇経図括第二十七では、十四経とその所属経穴や奇経八脈が図解されている。これはあまり知られていないが、明代鍼灸資料として貴重である。

本書は、『難経』の菽法脈法の展開その他の点から、中国歴代の脈書の中でも特異な位置を占めるものであるが、広く伝わらず、後代への影響も少なかったことは惜しまれる。